編集長から

冬山での経験

増田　一世

2006年は休日がほとんど取れなかったので，自分へのご褒美，そして，年末年始くらい自立支援法のことを忘れたいという思いもあり，アメリカのコロラド州のデンバーにあるスキー場に夫とともに出かけた．

天候にも恵まれスキーを楽しんでいたが，2007年1月1日正午近く，前を滑っていた夫が転んだらしく立ち上がらない．何となく近よっていくと，「やっちゃった！たぶん骨折だと思う」と．近くを滑っている人に，レスキューの人を呼んでほしいと頼んで，待つことしばし．10分ほどの時間がとても長く感じた．そして，医療センターに運び込まれ，レントゲンの結果，2か所ほど骨折していることがわかり，医師から町の病院で今晩手術したほうがよいと言われ，そのまま救急車で病院に搬送された．私は夫の心配もあったが，スキー場においてきたレンタカーはどうするか，ホテルまでどうやって帰るのか，日本にいれば，何ということもないことが，言葉がわからない，道もわからない状況の中で，途方に暮れた．夫はもう麻酔が効き，ほとんど頼りにならず，通訳もしてくれない．病院ではスキー靴で歩けず裸足で歩く情けなさも加わり，まさに「泣きたい気分」だった．頭の中で，①　スキー場までタクシーで戻って，靴を履き直し，レンタカーを運転して，この病院に戻る，②　夫の手術が終わるのを待つ，③　何時になってもいいからホテルに戻り，荷物をパッキングして，明日の朝には再び病院に戻ってくると覚悟を決めた．ハッケイ医師というスポーツ医学で著名な医師による手術は成功し，夫は麻酔がきき，ベッドに横たわっている．今や夫よりもレンタカーに搭載のカーナビゲーションが私の支え手であった．気づくとハンドルを強く握りしめていて，手が痺れるほどだった．漆黒の闇とも言いたくなる夜道を走っていて，ふと空を見上げると満天の星，星が降ってきそうな夜空だった．美しいと思う余裕もなく，車を飛ばした．コロラド山脈の山間を走る高速道路を約50キロほど走り，ホテルのある町まで戻ってきた．

2日目は少し余裕もでき，アメリカの病院を観察してきた．食事はフルコースメニューが用意され，電話もベッドサイドに用意され，シャワールームも室内に用意されている．後日送られてきた請求書の金額は，約250万円．部屋のごみを集めていたのは若い女性だったが，英語が全く話せず，至れり尽くせりの2泊3日の間にアメリカの一面を見た気もした．

私はあの晩，いくつかの困難を抱え，不安でいっぱいだった．環境が変わり，コミュニケーションに障壁があることで，不自由さが増大し，不安が強くなるのだと，改めて実感した．

こんな時，ふっと心がほぐれたのは，不安そうな私にタクシーを呼んでくれたり，食事をしてきなさいと優しく声をかけてくれた看護師さん，駐車場で一緒に車を探してくれたタクシーの運転手さん，相手にとっては特別なことではないかもしれないけれど，なぜかホッとする気持ちになった．